

# 香川大学検定をつくる！—自校教育へのアプローチ

河原 勝 浩 (経済学部1年)

林 晶 子 (教育・学生支援機構)

葛城 浩 一 (大学教育開発センター)

## 1. はじめに

近年、特定の地域や物事に関する知識を問う「ご当地検定」がブームとなっている。「ご当地検定」とは、「簿記検定などの資格や技能検定試験と同じように、定期的実施される認定試験で、特定の地域の歴史や文化、観光に関し、一定の知識を持った人に合格証を付与するもの」(池田 2007)である。「ご当地検定は、日本商工会議所が「各地の商議所が実施中または実施予定」として紹介している分だけでも現在62にのぼり、NPOや個人が実施する検定も含めれば、さらに多くあるものとみられる」(朝日新聞 2008、2月18日)。

このように、ご当地検定がブームとなっていること背景として、池田(2007)は、「地域を知ることが地域活性化の原点であるとの考えが広く認知されたことや、検定試験を通じて、観光振興や地域の文化・歴史などへの理解を深めようとの意識が高まったこと」(池田 2007、8頁)などを挙げている。こうした背景に鑑みれば、「ご当地検定」は高等教育の文脈で捉えなおすことも可能である。すなわち、「地域」を「大学」という言葉に置き換えてみれば、「[大学]を知ることが[大学]活性化の原点であるとの考え」や「検定試験を通じて、[大学]振興や[大学]の文化・歴史などへの理解を深め」といったように、現在、高等教育の現場においてそのニーズが高まってきている「自校教育」的な要素が浮かび上がってくるのである。

「自校教育」とは、「大学の理念、目的、制度、沿革、人物、教育・研究等の現況、社会的使命など、自校(自学)に関わる特性や現状、課題等を中心的な教育題材として実施する一連の教育・学習活動」(大川 2006、11頁)である。大川(2006)によれば、大学設置基準の大綱化以降、自校教育の実践が盛んに行われるようになっており、2005年時点では、全国国立大学の3割が自校教育に関する授業を実施し、2006年度に実施を予定している大学を含めると約4割の国立大学が自校教育を実施、もしくは実施準備を行っているという。

「自校教育」の取組には多様なアプローチが想定される<sup>1)</sup>が、そのひとつとして、「香川大学」をご当地とした検定、「香川大学検定」を作成することは有効であると考えられる。すなわち、「香川大学検定」の作成過程を通じて、香川大学への理解が深まり、香川大学への愛校心や帰属意識が高まることが期待できるとともに、完成した「香川大学検定」を教材として利用したり、あるいは配布等を行ったりすることで、香川大学への愛校心や帰属意識を高めるための一助としても期待できるからである。

「香川大学検定」作成の取組は、平成18年度にキャリア支援センターが採択された「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(現代GP)からの資金的援助を受けたことで、十分な成果をあげることができた。本稿は、その一連の過程を記録するものである。

(葛城浩一)

## 2. 教養ゼミナール「香川大学検定をつくる！」での取組

「香川大学検定」作成の取組は、まず、教養ゼミナールにおいて「香川大学検定をつくる！」という授業科目（2008年度前期）が設定され、半期をかけてその雛型を作成するところから始まった。以下、時間軸に沿って授業内容を簡単に説明したい。

第1回目の授業では、授業の趣旨が「「香川大学検定」の作成を通して、「香川大学」のことをより深く理解してもらい、それによって、「香川大学」のことをもっと好きになってもらうこと」であることが、担当教員である大学教育開発センターの葛城浩一教員から説明された。また、授業の目的・達成目標が、「①一連の授業を通して、「香川大学」についての理解を深められるようになること、②グループ作業を通して、適切に自分の意見を表現するとともに、他者とのコミュニケーションをはかれること」であることもあわせて説明された。

第2回目の授業では、各自が自分の興味のある「検定本」を用意し、各グループでそれらの「検定本」の共通点及び相違点を分析し、その分析結果をふまえて、各グループが考える「香川大学検定」のコンセプトを考えるというワークを行った。第3回目の授業では、第2回目のワークの内容を報告し、その後、ブレインストーミングやKJ法といった発想法の学習を行った。まず、各グループに付箋が一人50枚ずつ渡され、15分間で考える「香川大学検定」の質問項目を書き出し、その後、KJ法によって、書き出された質問項目を20分間でマッピングするというワークを行った。

第4回目の授業は、第5回目の授業で行う中間プレゼンのための準備の時間にあてられた。中間プレゼンでは、まず第3回目のグループワークで得られたマッピングの説明に加え、「香川大学検定」の企画書を作成し、その企画書をふまえて、先のマッピングを修正するという課題が与えられた。中間プレゼンには、民間企業での豊富な経験を持つ、アドミッションセンターの山崎裕正教員をゲストに迎え、各グループのプレゼン内容に対する適切なコメントをいただいた。

第6回目から第9回の授業は、第10回目の授業で行う企画コンペのための準備の時間にあてられた。企画コンペは、各グループが3つの条件下（①レイアウト等を含む完成原稿で提出すること、②質問項目を30問作成すること、③各質問項目には200字以上の解説文を設けること）でその出来を競うものとし、コンペに敗れたグループは、コンペで勝ったグループのコンセプトの下、「香川大学検定」の作成を行うこととされた。企画コンペには、香川大学の歴史に造詣の深い生涯学習教育研究センターの山本珠美教員に加え、就職支援グループ（現 教育・学生支援機構）の林晶子さん、教育学部3年の近成麻子さんを審査員に迎え、各グループのプレゼン内容に対する審査とともに適切なコメントもいただいた。

第11回目の授業では、企画コンペで勝ったグループによって、そのコンセプトが改めて示され、それに沿った役割分担が行われた。そしてその役割分担にしたがって、次回の授業までに叩き台の作成を行い、次回の授業では全員でそのチェックを行うという作業を、第12回目の授業から第14回目の授業まで繰り返し行った。そして、第15回目の授業では、完成した「香川大学検定」をもとに、自分の分担した部分に対する感想や、この「香川大学検定」をさらに良くするための改善点についてコメントをしてもらい、授業を終えた。



教養ゼミナール「香川大学検定をつくる！」を受講した学生たち

### 3. 学生支援サークル「MINtS (ミントス)」による取組

このように、教養ゼミナール「香川大学検定をつくる！」では、半期をかけて「香川大学検定」の雛型が作成された。しかし、この「香川大学検定」は、その作成過程を通じて、香川大学への理解が深まり、香川大学への愛校心や帰属意識が高まることには寄与していたとしても、その過程に携わっていない第三者の、香川大学への愛校心や帰属意識を高めるためのツールとして十分なレベルに達していたわけではなかった。その大きな要因は、作成に携わった彼らが1年次の学生であることが大きい。すなわち、1年次の学生は、香川大学での経験が十分でないために、設定される質問項目が各人の生活圏で構成されており、その結果、質問項目間の連関や深みに乏しいものとなっていたのである。

そこで、教養ゼミナールで得られた成果を叩き台としながら、教養ゼミナールの受講生であった河原が、自身の所属する学生支援サークル「MINtS (ミントス)」のメンバーとともに、その完成を目指すプロジェクトを立ち上げた。そのプロジェクトには、MINtSのメンバーのほか、教養ゼミナール「香川大学検定をつくる！」の担当教員であった大学教育開発センターの葛城教員をはじめ、先述の生涯学習教育研究センターの山本教員、就職支援グループ（現 教育・学生支援機構）の林さんにも加わっていただいた。



ミーティングの様子

第1回ミーティングでは、まず葛城教員から、教養ゼミナール「香川大学検定をつくる！」で目指された「香川大学検定」作成の目的が説明された。その後、教養ゼミナールで得られた成果をもとに、このプロジェクトが目指す「香川大学検定」作成の方向性を検討した。その方向性は、主に以下の3点である。

- (1) 問題及び解答よりも、むしろ解説が重要である。いくら面白い問題であっても、その問題を通して、香川大学に対する理解が深まるようなものでなければ意味がない。
- (2) 問題の羅列にならないよう、問題を並べる順番を考慮する。その構成を系統だったものにする事で、ひとつの「読み物」として完結したものとする。
- (3) 学外者を意識して問題を作成する。本学関係者にしかわからない問題は載せない。本学関係者は勿論、近隣住民や高校生が読んでも興味深い知識・情報を提供する。

こうした方向性に従って、役割分担が行われた。そして第2回目のミーティング以降、その役割分担にしたがって、叩き台の作成がなされ、次のミーティングでは全員でそのチェックを行うという作業を繰り返し行った。ミーティングは、前期終了直後の7月末から、10月の中旬にかけて10回程度行われた。

(河原勝浩)

## 4. 「香川大学検定」の特徴

こうしたプロセスを経て、上記のような方向性に沿った「香川大学検定」は完成した。これだけでも十分に読み応えのある出来に仕上がったが、さらに完成度を高めるためにいくつかの「仕掛け」を施した。以下では、特徴的な4点について紹介したい。

### (1) キャラクター

「香川大学検定」のナビゲーターを務める「くうかいくん」と「こんぴらちゃん」は、教養ゼミナール「香川大学検定をつくる！」の受講生が発案したキャラクターである。「くうかいくん」は弘法大師・空海をモチーフとしており、「こんぴらちゃん」は金毘羅宮出身で、二人とも香川大学1年生という設定だ。四国八十八ヶ所も金毘羅宮もともに、四国・香川県を代表する神社仏閣である。読者に親近感や愛着を抱いてもらえることを期待し、このキャラクター達を「香川大学検定」の顔として起用することとした（資料1参照）。

### (2) お遍路さんに見立てた構成

お遍路さん（四国八十八ヶ所）にちなんで、問題数は88問とした。また、4つのセクションを設定し、各セクションの問題数も、四国各県に存在する霊場数にちなんで、22問ずつとした。ページ数もこだわりの88頁である。巻末に収録されているスゴロクでは、スゴロクの要領で問題を解きながら、お遍路を疑似体験できるような仕掛けも施した（資料2参照）。

### (3) うどんに見立てた構成

「香川大学検定」は4つのセクションが設けられているが、この各セクションはうどんに見立てた構成がなされている<sup>2)</sup>。すなわち、セルフうどん屋と同じ工程（お椀に麺を入れてもらい、ダシをかけて天ぷらやネギをトッピングする）で、セクション分けがなされている。本書を最後まで解けば、うどんが出来上がり、香川大学の基本的な情報からマニアックな知識までを順を追って理解できるという仕組みである（資料3参照）。

### (4) 「読み物」としての工夫

ただ問題を解くだけでなく、「読み物」としても十分楽しめるよう、大学を紹介するコラムを随所に掲載した。大学の歴史や学章の変遷、さらにはキャンパス内の不思議なスポットなどを紹介し、香川大学に関心を持ってもらう工夫をしている。また、ページのフレームや口絵などにはうどんやキャラクターのイラストを、問題や解説には写真や地図などを挿入し、読みやすく視覚的に美しくなるよう心がけた（資料4参照）。

（林 晶子）

## 5. おわりに

こうして完成した「香川大学検定」は、大学祭の日にあわせてお披露目され、大学祭の盛り上げに華を添えた。また、大学祭にあわせて開催された「ホームカミングデー」<sup>3)</sup>では、その参加者に配布され、好評を得ていた。加えて、新聞やテレビ等、複数のメディアで取り上げられたことによって<sup>4)</sup>、「香川大学検定」の入手希望の問い合わせが学外から多く寄せられている。こうした一定の成果をあげることができたことを、「香川大学検定」の仕掛け人のひとりとして、学生以上に大変嬉しく感じている次第である。

今後、「香川大学検定」は本学の学生や教職員に対しての配布は勿論のこと、本学の学生予備軍である高校生にも、オープンキャンパスや高校訪問の際に配布していく予定である<sup>5)</sup>。大学の内外を問わず、より多くの人々に「香川大学検定」を手にとってもらうことによって、香川大学に対する理解がより深まるとするならば、本学関係者のみを視野に入れた「自校教育」以上の成果が得られるといえる。そうした意味において、「香川大学検定」は単なる「自校教育」を越えた取組の可能性を秘めているのである。

(葛城浩一)

## 参考文献

朝日新聞「ご当地検定「品定め」」、(2008年2月18日)。

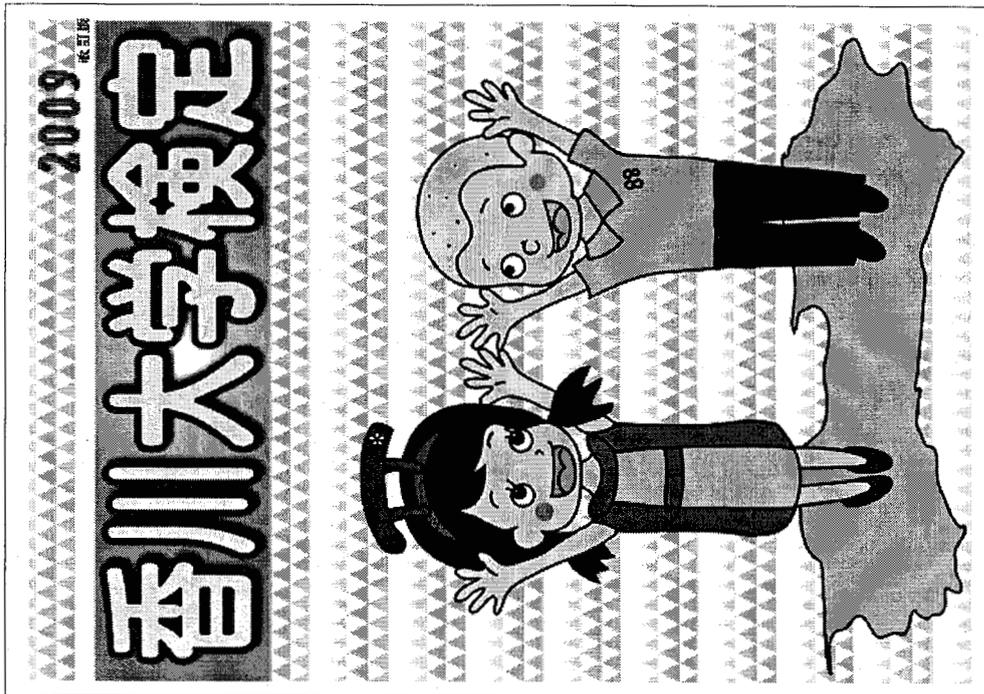
池田晋介、2007、「地域活性化策として全国に広がる「ご当地検定」」『経済月報R&I』9月号、8-11頁。

大川一毅、2006、「大学における自校教育の現況とその意義-全国国立大学実施状況調査をふまえて-」『秋田大学教養基礎教育研究年報』第8号、11-21頁。

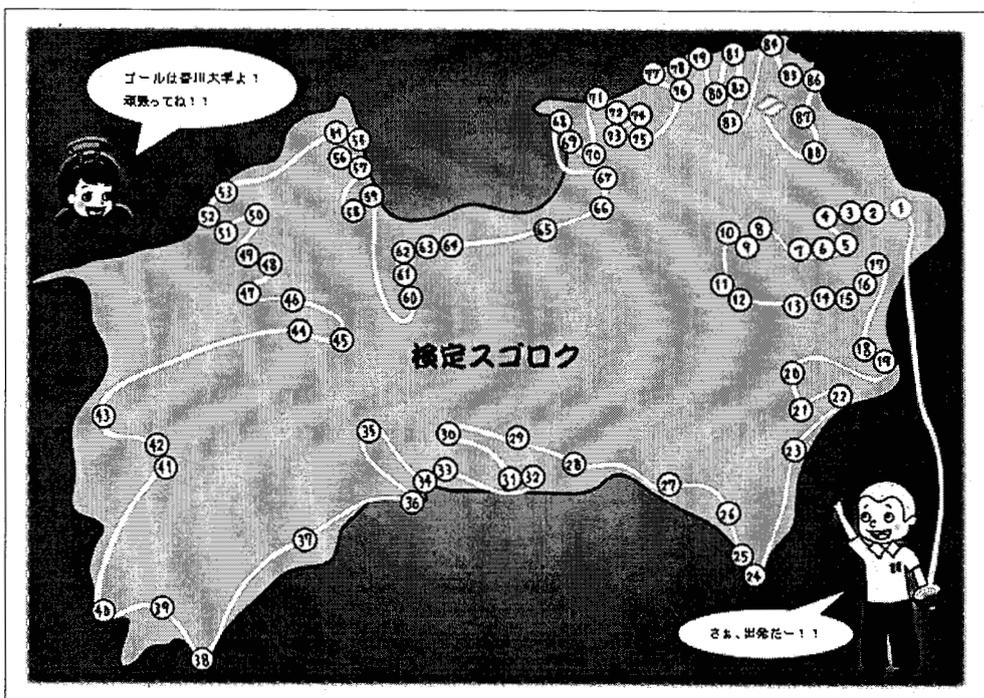
## 注

- 1) 例えば、北海道大学では、全学共通一年次科目として「北大エコキャンパスの自然と歴史」「北大発見のススメ」「北大総合博物館で学ぼう！自然と人間」といった諸授業を自校教育の一環として実施している。こうした授業では、初年次生に「上から与える自校教育」ではなく、学生が主体的に大学に関する情報収集を進め、これをふまえた問題設定を行い、学生同士による議論・検討を重ねて、最終的には「学長への提言書」を作成したり、公開プレゼンテーションを開催したりするなど、自校の建設的な発展に向けた提言が行われているという(大川2006)。
- 2) セクション1では「お椀」を「大学のキャンパス」と見立てて、香川大学の基本的な問題を、セクション2では「麺」を「コシのある学生」と見立てて、そのような学生を育てるための教育活動についての問題を、セクション3では「ダシ」を「大学の歴史」と見立てて、香川大学の歴史や文化に関する問題を、セクション4では「トッピング」を「大学生生活の楽しみ」として課外活動に関する問題を出题している。
- 3) 「ホームカミングデー」とは、卒業生や教職員OBを本学に迎えるイベントである。各学部のキャンパスツアーや、学長と卒後50年以上の方々との懇談会、歓迎式典、特別講演、懇親パーティーなどが催された。
- 4) 新聞では、日本経済新聞(2008年11月17日)、四国新聞(2008年11月18日)、読売新聞(2008年11月20日)、毎日新聞(2008年11月22日)、山陽新聞(2008年11月25日)、産経新聞(2008年12月7日)で、テレビでは、NHKの「おはようかがわ」(2008年11月6日)、KSBの「スーパーJチャンネル」(2008年12月15日)で取り上げられた(資料5参照)。
- 5) なお、大学祭の一企画として、MINtS主催による高校生向けの相談会を行ったが、参加した高校生からは、「大学案内よりも香川大学に対する理解が深まる」と好評であった。

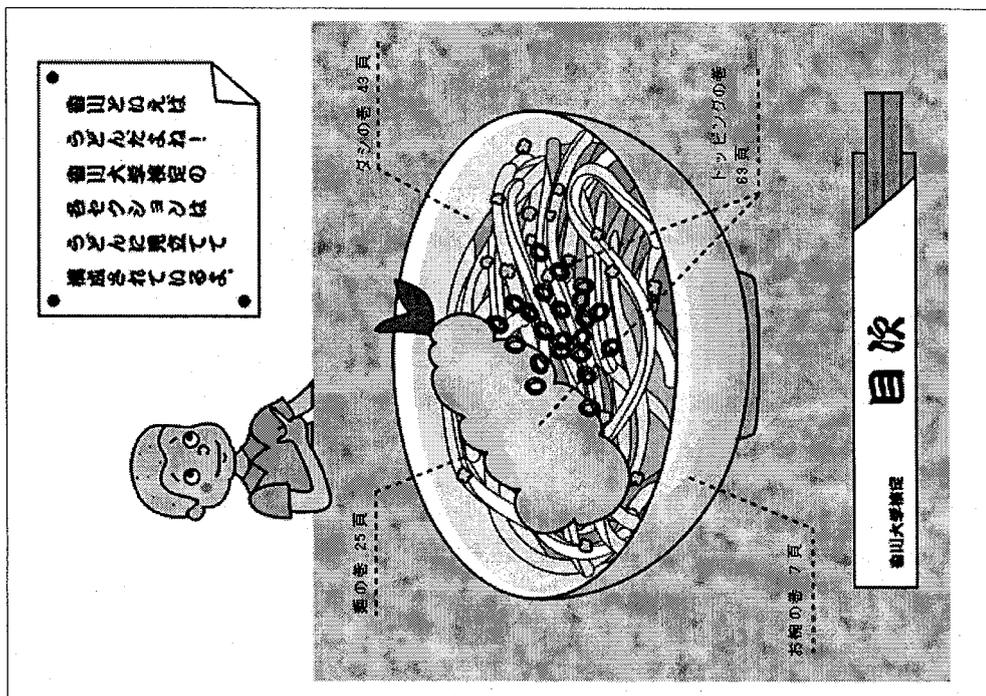
香川大学検定をつくる！-自校教育へのアプローチ



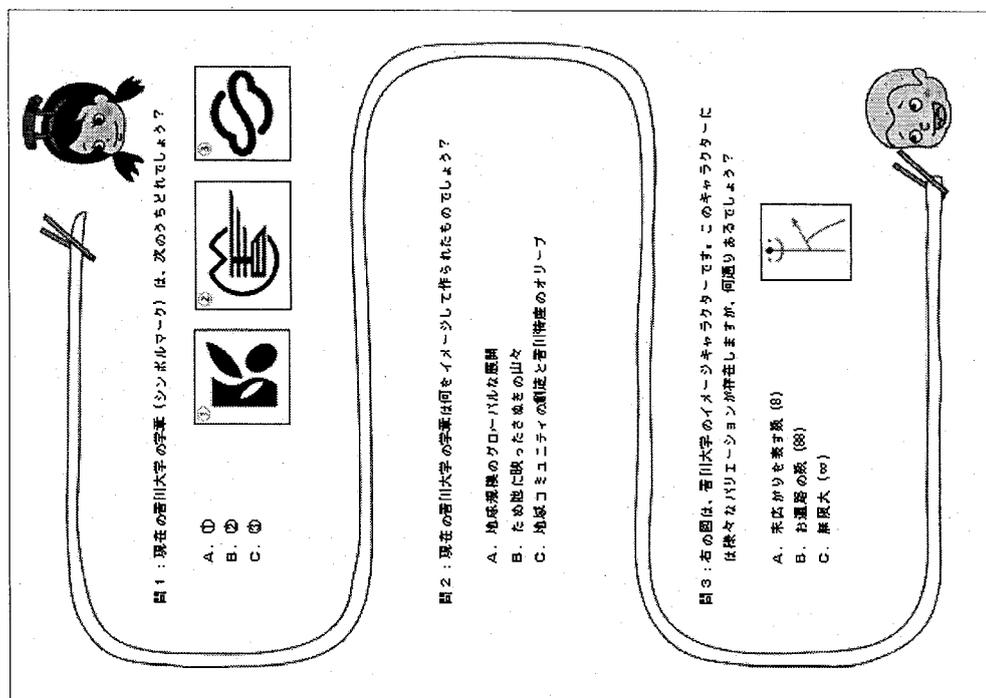
資料1. 「香川大学検定」表紙



資料2. 「香川大学検定」スゴロク



資料3. 「香川大学検定」目次



資料4. 「香川大学検定」問題ページ

資料5. 山陽新聞 (2008年11月25日)